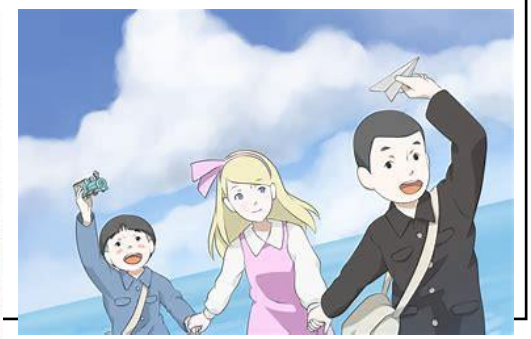
取り戻せ！歴史も語る北の四島

宮崎学園中学校　1年
吉永　采同晴

「**北方領土奪還に向けて**」

今回の研修の中で最も印象に残っているのは色丹島出身である得能宏さんの講演を聞けたことである。得能さんは「**ジョバンニの島**」という北方領土の色丹島に暮らす一家が終戦後に体験した過酷な運命を描いたアニメーション映画の主人公モデルにもなった方だ。今回お話を聞く際、涙ながらに話される姿を見て、私達も「**北方領土奪還に向けて何か行動しなければならない！**」という気持ちが掻き立てられた。しかし北方領土問題から約７０年以上たってしまった今現在まで、何の糸口も見出せていないため、「**もう奪還なんて無理なのではないか。**」と思ってしまう方も当然いて、国民の北方領土への意識が風化の一途をたどっているというのが現実である。けれど、このまま北方領土奪還をあきらめてしまったら、これまでに亡くなってしまわれた元北方四島の出身の方たちの気持ちはどうなるのだろうか。元島民の方々の平均年齢はもう80 歳を超えているため、「死」までのタイムリミットは刻々と近づいている。だからこそ、「**今ここで私達若い世代が協力し合い、思いを受け継ぎ、行動していかなければならない！！**」**と改めて実感させられた**講演会だった。



「**四島の架け橋**」

皆さんは「**四島の架け橋**」を知っているだろうか。これは、北方領土返還祈念のシンボル像として建てられたものである。北方四島を４つのブロックで表現し、それらが連なりあって大きな架け橋となっている。底辺の長さ３５メートル，高さ１３メートル，幅３～５メートルもありその中央には祈りの火と呼ばれる沖縄の南端に位置する波照間（ハテルマ）島で古式に則り採火されたものが１９８１年に点火され「**北方領土返還運動の火を絶やすな**」**という合言葉**のもと、返還実現のその日まで、今現在も北方領土に向かって灯し続けられている。実際に行ってみると北方領土の島々とロシアと北海道の境界線に建っている白い灯台が肉眼でも見えるほど近くにあることを知り驚いた。魚や動物は境界を越えられるのに、自分達は超えることができない**透明な壁**のようなものを感じ、とてももどかしく感じた。これがもし、「自分の生まれた土地に自由に帰れなくなったら」と考えると、元島民の方々の気持ちは私達には計り知れないほどに苦しいものだろう。

「**研修の感想**」　私が今回の研修の中で学んだことは、現地に行ってからではないとわからないことがあるということです。今回の研修は参加する前に自分の考えを作文にしていたので、北方領土のことは分かった気になっていたのですが、実際に現地に行き、体全体で体験することで自分が今まで分かっているようで分かっていなかったことを痛感させられました。「ビザなし交流」は５年前までは行われていましたが、コロナ禍やウクライナとロシアの戦争の影響で、もう行われていないことなど、教科書やインターネットなどには載っていないような内容を直接聞くことができてとても勉強になりました。私は、話を聞くまで元島民の方々はロシア人のことを憎んでいるのではないかと思っていたけれど、ロシア人の方々は根室の街や生活に密接な関係を持っていて友好的な方が多く、一部では北方領土を北海道に返還するのに賛成してくださっている方もいるそうです。あとは私達若い世代がどう行動するかが鍵になってくると思います。今回の研修は自分の経験、知識、考えなどを深めることができとても有意義な研修でした。今後は今回学んだことを友人からでも少しでも多くの人に伝えて行きたいと思います。そうすることで「**１人の一歩ではなく、100 人の一歩**」となり、何かを変えていくことにつながると信じています。私たちに研修をさせてくださった多くの方々に**感謝**の気持ちでいっぱいです。**ありがとうございました。**